

「道德」の成立

—西周の思想背景を中心に—

水野雄司

問題の所在

「道德」は、日本においていつ成立したのだろうか。

問題としたいのは、道德心や倫理意識、正義観といった概念ではなく、あくまで言葉としての「道德」である。『日本国語大辞典』(小学館)によると、語彙としての「道德」の起源は古代中国にあり、『易経』が初出とされている。日本における最古の出典は六国史の一つ『続日本紀』であり、慶雲3(706)年に「道德仁義因礼乃弘」という記述がある。その後、鎌倉時代の『正法眼蔵随聞記』(道元の法語集, 室町時代の『文明本節用集』(用語集)、江戸時代初期の『わらんべ草』(狂言の伝書)などの使用例が挙げられている。また幕末の思想家、佐久間象山(1811-64)の「東洋道德、西洋芸」という言葉はあまりに有名である。

このように、「道德」の語誌は比較的明らかであるが、今に使われる「道德」がこれらと継ぎ目なく繋がるかという点と疑わしい点がある。なぜなら本稿でこれから見ていくように、「道德」とは新漢語(和製漢語・近代漢語)という性格も持ち合わせているからである。「新漢語」とは、とくに幕末以降、西欧からもたらされた新たな概念を表すために、中国の古典や在来の仏教語などから借用して造られた言葉のことである。森岡健二は「新漢語」を、「置きかえ」「再生・転用」「変形」「借用」「仮借」「造語」に区別し、たとえば「道德」と非常に近い意味で使われる「倫理」という語を、「再生・転用」による新漢語の成立例として挙げている。それまでも語彙としては存在していたが、今につながる「倫理」は、明治において新たに成立したということである。「倫理」と比べるとその歴史性は強いが、これと同様のことが「道德」にも言えると考えられる。

日本の「道德」という言葉は、近代において変容したのではないか。この問いに対して、その変化におおいに かかわったとされる明治に活躍した西周(1829-97)の思想を見ていくことで、ひとつの回答を見出すことが本稿の目的である。